

五期俳句会第百六十五回五月五日

今日は子供の日、多分蔵本さんが柏餅を持って来てくれるだろうと予測して、濃く出したお茶に氷をいれて持って行ったがポットが小目だったので少しづつしか当たらなかった。
でも、皆おいしく頂く。

粗供養の薄墨の文字桜蕊降る

浅香さとみ

日脚延ぶ帰宅ゆうげの遅れがち

塩田亘子

野歩きや流の向こう掛かり藤

松浦武子

新緑や大地を覆う生氣かな

今井由紀子

葬終えし目にたんぽぽの黄生きている

浅香さとみ

うす絹を覆うが如き野辺の春

塩田亘子

春宵に音爽やかに加賀用水

久貝貞子

年老いた君新緑の中に笑む

今井由紀子

宮参道みどりが癒す花のあと

塩田亘子

お天気のところろ変わる春の雨

久貝貞子

菜種梅雨ぼけたかしらという恐怖

今井由紀子

鈴蘭の可憐に咲きて毒を持ち

松浦武子

花冷えや命の終わりの声を聴く

浅香さとみ

春日さしかる鴨一家水遊び

久貝貞子

桐薫る見上げる先に大阪城

松浦武子

風薫る下宿先より孫の文

今井由紀子

くれなずむ中天白き春の月

塩田豆子

野仏に供えし如く著莪の花

松浦武子

葉さくらに和む裏道石仏

塩田豆子

土割って芋の芽の出る濃紫

今井由紀子

犀生の愛する川に桜咲き

久貝貞子

暑さ寒さ又雨、晴れの変動の大きな今日この頃で、句創りには困る日々が多い中、皆頑張っています。中には二季の句もあるが、私は先生ではないからあまり言えないし、自分自身間違う事も有るので困る。まあ、お許し下さい。